

岡山市埋蔵文化財発掘調査速報展2017

と き 平成29年10月27日(金)・30日(月)
ところ 岡山市役所 1F 市民ホール

大供本町(鹿田小)遺跡 岡山市北区大供表町

鹿田小学校の校舍耐震化工事に伴い発掘調査が実施されました。大供本町遺跡では、過去の調査で古代から中世にかけての遺構や遺物が多く確認されており、旭川河口部西岸付近に存在が推定される藤原氏の殿下渡領「備前国鹿田庄」の一部にあたると考えられています。

今回の展示物は、主に広域にわたる流通に関係する品々です。輸入陶磁器である白磁は12世紀ごろのもの、青磁は13～14世紀ごろのものであり、中国銭も12世紀を境に大量に輸入され、以降全国に広がります。また、東播系須恵器は現在の神戸市から明石市付近で生産されたものです。もちろん、岡山市内の備前焼の出土もあります。

鹿田庄の荘園遺跡は、九州から京を結ぶ流通経路の中間地点に位置しており、瀬戸内海における海上交通の拠点としてその規模を拡大し、成長を遂げたものと考えられます。

造山古墳 岡山市北区新庄下

造山古墳は全国第4位の規模を誇る墳長350mの前方後円墳として有名です。岡山市教育委員会では平成26年度より造山古墳群の保存整備事業として範囲確認調査を実施しています。平成28年度は、造山古墳の前方部南西隅周辺の墳丘残存状況の確認や前方部南側の谷部における旧地形の把握が主な目的となりました。

調査の結果、墳丘を覆う葺石の一部を確認しました。造山古墳の規模や墳形を今後追求していくうえで重要な発見といえるでしょう。トレンチ1-1では、基底部に当たる部分から2～3段の葺石が残存し、それより上の部分は近世以降の耕作等によって失われていました。一方トレンチ3は、保存状態が比較的良好で、基底部から5～6段積まれた状況を確認できました。ただし、前方部南西隅の角部分は、後世の掘削によって破壊されていました。

出土遺物は、埴輪片が多数出土しています。これらの埴輪は保存状態が比較的良好で古墳の上に立て並べられていたものと思われます。

岡山城跡本丸下の段 岡山市北区丸の内

岡山城は慶長2年(1597)に宇喜多秀家によって築かれた梯郭式の平山城で宇喜多氏が滅んだ後は小早川氏や池田氏ら代々の城主によって拡張や改修が行われています。調査地点は本丸下の段西側の内堀内石垣で『御城内御絵図』(元禄13年)によると油槽から北側の隅槽までの石塁が描かれている場所にあたります。

石塁の城内側は現状では盛土され土塁状を呈していますが、調査の結果『御城内御絵図』に記載のない石段を発見したほか石塁上面で土堀の基礎とみられる石材を検出しました。内石垣の前面からは大量の瓦で埋められており、これらの瓦は城郭内の建物が破却された際のものと考えられます。出土遺物は大量の瓦類のほか備前焼、陶磁器類、貝殻などです。

北山古墳群 岡山市東区浦間

太陽光発電設置工事に伴い調査しました。北山古墳群は、吉備最古の前方後円墳とされる浦間茶臼山古墳(3世紀後半築造、全長140m)の北約500mの丘陵尾根上に位置します。4世紀～5世紀にかけて築かれたようです。

調査の結果、4基の方墳の存在を確認し、そのうち1・3・4号墳では埋葬施設の存在が明らかになりました。出土遺物は、1号墳からガラス玉1点・人骨の碎片が出土しました。

3号墳では鉄剣が1点出土し、4号墳では鉄斧1点、鉄刀1点、鉄剣1点が出土しました。

このうち1号墳では、埋葬施設の中に安山岩と呼ばれる香川県北部で産出する石材が含まれていました。同じ石材が浦間茶臼山古墳の石室にも使用されており、両者の関係が注目されます。この他出土遺物として、人骨片が数点とガラス玉が1点が出土しました。また3号墳では、埋葬施設の痕跡が3基確認できました。全て木棺を粘土で包み覆った粘土槨と呼ばれる埋葬施設でした。副葬品は中央埋葬から鉄剣が1点出土しています。

金蔵山古墳 岡山市中区沢田・円山

金蔵山古墳は操山丘陵のほぼ中央、標高100mほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長約165mとされ、造山古墳以前では中四国九州で最大規模を誇ります。平成23年度から史跡指定を目指し測量調査、範囲確認調査を実施しています。

平成28年度の調査は、測量調査で「島状遺構」とみられる高まりがある東側くびれ部から前方部東側斜面を中心に行いました。この地点では墳丘とこの高まりの間をつなぐ陸橋が検出され、高まりがいわゆる「島状遺構」であることが判明しました。墳丘側は前方部の1段目の平坦面にあたり、円筒埴輪が密集して10基ほど並べられています。島状遺構の上面は全面に小さな円礫を敷き詰めていたようです。埴輪は柵形埴輪とみられる破片が出土していますが、いまのところそれ以外の形象埴輪は見つかっていません。

前方部東側斜面では前方部最下段の葺石と埴輪部の構造を検出しています。円筒埴輪2基が約1.2mの間隔をあけて見つかりました。後円部埴輪端や1段目より上の平坦面の埴輪列が間隔を空けず密集して並べられているのに対し、前方部埴輪端では間隔をあけて並べられているようです。これまでの調査で、金蔵山古墳では墳丘の両側で造り出しと島状遺構を造り分けていることがわかりました。造り出しと島状遺構でどのような性格の違いがあったのか、それぞれどのようなマツリが行われたのか解明する手がかりとなることが期待されます。今回の調査では島状遺構上や周辺に配置された埴輪はほとんどわかりませんでしたが、今後、造り出しの埴輪群と比較できるような埴輪が見つかることが期待されます。